

# 京大 広報

Kyoto University



※ P4720 参照



※ P4723 参照



※ P4724 参照

2016.11  
No. 726

## 目次

### [巻頭言]

大学は日本を救うことができるだろうか ..... 4697  
監事 東島 清

### [大学の動き]

- 理事が発令される ..... 4699
- 経営協議会委員（学外委員）が発令される ..... 4700
- 副学長が発令される ..... 4701
- 副理事が発令される ..... 4702
- 理事補が発令される ..... 4702
- 平成 28 年度総長杯（ディスクドッジ大会）を開催 ..... 4703
- 熊本地震被災者救援義援金についてのご報告 ..... 4703
- 第 11 回京都大学東京フォーラムを開催 ..... 4704
- タイ科学技術フェア 2016 へ JASTIP/京都大学として出展 ..... 4705
- 京都 ASEAN フォーラム 2016 を開催 ..... 4706
- 第 54 回近畿地区国立大学体育大会を開催 ..... 4707
- 全学教育シンポジウム「データと理想にもとづいて考える  
京大の教育改革－入試から大学院教育まで」を開催 ..... 4708
- 「京都大学オープンキャンパス 2016」を開催 ..... 4709
- 京都大学サマースクール 2016 「暑い夏の 1 日、  
京大生になろう！」を開催 ..... 4710
- ウイルス・再生医科学研究所が発足 ..... 4711

### [寸言]

「寮費 3 倍化値上げ反対」運動の思い出 尾藤 廣喜 ..... 4712

### [随想]

21 世紀の課題：優しい地球・社会環境を ..... 4713  
名誉教授 笠原 三紀夫

### [洛書]

10 Years of iPSCs 吉田 善紀 ..... 4715

### [話題]

- 社寺見学会を実施 ..... 4716
- 第 20 回リカレント教育講座「『心の教育』を考える－  
発達障害の理解と対応－」を開催 ..... 4716
- 大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座  
『母子関係と創造性－ウィニコット理論から「受胎告知」  
を理解する－』を開催 ..... 4717
- 第 3 回博士課程リーディングプログラムオールラウンド型  
7 大学シンポジウム (AR7 シンポジウム) を開催 ..... 4718
- 思修館国際セミナーを開催 ..... 4719
- 桜島新観測坑道竣工記念式典を開催 ..... 4720
- バヌアツ共和国タンナ島の在来建設技術の高度化を  
支援する JICA 草の根事業を開始 ..... 4721
- 高等教育研究開発推進センター 大学生研究フォーラム  
2016 を開催 ..... 4722
- 第 9 回次世代グローバルワークショップを開催：  
共同学位を見据えて ..... 4723
- グローバルサイエンスキャンパス ELCAS  
平成 28 年度国際クラスベトナム研修を実施 ..... 4724

### [訃報]

越島 哲夫 名誉教授 ..... 4726



京都大学



## 巻頭言

## 大学は日本を救うことができるだろうか

監事 東島 清



大隅良典氏が2016年ノーベル生理学・医学賞を受賞され、大学における基礎研究の重要性が大きく取り上げられています。願わくばこれを機に国立大学運営費交付金の減額に歯止めがかかることに期待が高まっています。

私は1966年に京都大学理学部に入学し、その後幾つかの大学や研究所における教育・研究を経験しました。ノーベル賞を受賞した日本人はまだ湯川さんと朝永さんだけで、湯川さんは現役の教授でした。ノーベル賞といえば京都大学が思い浮かぶ位でしたので、理学部に入学した時の自己紹介では、将来は理論物理をやりたいという生意気な学生ばかりだったのを覚えています。

その頃の大学は基礎研究と高等教育を一手に引き受けており、産業界と協力するのはとんでもないという雰囲気でした。Japan as Number Oneと言われた日本の企業は日本的経営で世界を席卷しており、実務的なことは社内教育でしっかり鍛えるので、大学は優秀な人を選抜し基礎教育さえやってくれたら良い、という考えだったと思います。税収がどんどん増えていた高度経済成長期には、日本政府も国際機関やODAなどを通して国際的な存在感を高めていました。また文教政策にも鷹揚で、学部や研究所を新設するときには予算と教職員定員もつけてくれました。科学研究費補助金はまだ小規模でしたが、大学を通して配分される校費で小さな研究を行うことができました。インターネットもなく、先生方も研究室で毎日学生たちと何時間もだべっておられました。物理学の分野でも、日本の経済力を背景に宇宙線研究所のカミオカンデや高エネルギー物理学研究所などの巨大実験装置が建設され、日本の素粒子物理学は世界のトップに上り詰め、小柴昌俊氏、小林 誠氏、益川敏英氏、梶田隆章氏のノーベル賞受賞者を次々に生み出しました。その頃、大学、産業界、政府はそれぞれの持ち場を守って頑張っていたように思います。

大学を取り巻く環境はこの50年間に大きく様変わりしました。貿易黒字を謳歌していた日本は度重なる貿易摩擦を引き起こし、円高に続くバブル崩壊により、長引く不況に陥りました。国債残高は1,000兆円を超え景気対策と財政再建のはざまで、次世代に莫大な借金を残さないための有効な政策を見いだせずに、日本政府は苦しんでいます。更に少子高齢化の進行により社会保障費は毎年増え続け、税収は58兆円しかないのに、社会保障費が32兆円、国債の償還が24兆円に達しており、この2つの支出だけで税収はほぼ消えてしまいます。政策に必要な一般歳出26兆円と地方交付金15兆円の多くは国債を発行して賄うしかない状況です。一般歳出のうち5兆円余りを文部科学省予算が占めており、そのうちの1兆円ほどが国立大学の運営費交付金に充てられています。

アジア諸国の急成長とグローバル化の進展により、かつて日本が誇った繊維、鉄鋼、家電、電子産業などは見る影もなくなり、日本企業は勢いを失っています。かつて景気が良かった

ころは、先進諸国の研究成果を使って製品を開発し日本が儲けているという「基礎研究ただ乗り論」が盛んになりました。これを受け多くの大企業がベル研究所をまねて基礎研究所を作りましたが多くはうまくゆかず、その後はコストに見合わない基礎研究は大学に任せるようになり、大学に対する期待が高まりました。

かつては護送船団方式と呼ばれた国立大学も、行政改革の一環として2004年に国立大学法人となり、予算や人事などにおいて大幅な裁量権が認められましたが、規制緩和の代償としていくつかの業績評価が義務付けられ、国立学校特別会計に代わって設けられた運営費交付金は毎年約1%削減されてきました。運営費交付金の削減分を補うために、産業界との共同研究による研究費獲得や特許収入・寄付金集めに力を入れるようになってきました。一方で、産業界は社内教育で行う余裕も無くなりすぐに役に立つ人材育成を大学に求め、研究においてもイノベーションを生み出す基礎研究を大学に求めるようになりました。国民総生産が伸び悩む中、政府もまた国立大学改革プランなどでは、大学に人材育成だけでなくイノベーションの拠点として教育研究機能を最大限に発揮することを求めてきています。

労働人口減少が進む日本で人々が豊かに暮らすには、一人一人の生産性を高める必要があります。そのためには絶え間なく様々の分野で新たな価値を生み出すことができるように、創造性豊かな人材を大勢育てる必要があると思います。イノベーションを美しい花に例えるなら、その基礎となる太い幹と広い範囲に広がるしっかりした根っこが必要です。基礎研究は計画した通りには進まず沢山の失敗の中に新たな真理の芽を見つける必要があります。短期的な成果を求められる企業では難しいのは当然です。大学と企業が連携してイノベーションを目指すのは、日本の生産性を高めるためには良いことですが、もっと長期的視野に立ちもつと広範囲にわたる大学の基礎研究全体を支えるしっかりとした根を張り巡らしておくことも必要です。

大学の教育・研究を支える運営費交付金をこれ以上減らすと日本の未来はないと、私たち大学人は主張します。それだけでは社会保障費と国債償還費に苦しむ財務担当者を動かすことはできません。政治家・官僚・財界人を見回しても、30年後の明るい日本に導く確かなシナリオを持っている人はいないように思われます。大学はあらゆる分野の知のプロフェッショナルが集まる巨大なシンクタンクです。このようなときに、大学の持てる力を結集して考えうるベストな政策を提言することが、大学のできる最大の社会貢献だと思います。政治が将来の夢を描けない今、一人一人が持つ創造性を十分に発揮できるように、大学の人材育成と基礎研究に投資することが、確かに30年後の豊かな日本に導くことを大学は示すべきではないでしょうか。

[目次に戻る ↗](#)

大学の  
動き

理事が発令される

現理事の任期満了に伴い、10月1日付けで理事が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



産官学連携担当  
阿曾沼 慎司 (再任)



男女共同参画・  
国際・広報担当  
稲葉 カヨ (再任)



学生・図書館担当  
川添 信介 (再任)



教育・情報・評価担当  
北野 正雄 (再任)



財務・施設・  
環境安全保健担当  
佐藤 直樹 (再任)



総務・労務・人事担当  
清木 孝悦 (再任)



研究・企画・病院担当  
湊 長博 (再任)

[目次に戻る ↗](#)

大学の  
動き

経営協議会委員（学外委員）が発令される

現経営協議会委員の任期満了に伴い、10月1日付けで経営協議会学外委員が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



株式会社サキコーポレーション  
代表取締役社長  
秋山 咲恵（新任）



国立研究開発法人国際農林  
水産業研究センター理事長  
岩永 勝（再任）



びわこ成蹊スポーツ大学学長  
嘉田 由紀子（再任）



構想日本代表  
加藤 秀樹（再任）



京都市長  
門川 大作（再任）



株式会社日立製作所  
執行役専務  
小島 啓二（再任）



大学共同利用機関法人  
人間文化研究機構理事  
小長谷 有紀（再任）



豊田工業大学学長  
榎 裕之（再任）



独立行政法人日本学術振興会  
学術システム研究センター所長  
佐藤 勝彦（再任）

大学の  
動き



公益財団法人ヒューマン  
サイエンス振興財団会長  
竹中 登一 (再任)



京都信用金庫理事長  
増田 寿幸 (再任)



京都府知事  
山田 啓二 (再任)

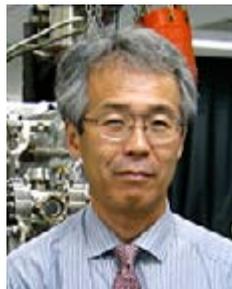


京都市立芸術大学学長  
鷺田 清一 (再任)

[目次に戻る ↗](#)

## 副学長が発令される

現副学長の任期満了に伴い、10月1日付けで副学長が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



教育改革担当  
有賀 哲也 (再任)



大学基金・同窓会担当  
徳賀 芳弘 (再任)



共通教育担当  
村中 孝史 (新任)



法務・コンプライアンス担当  
山本 克己 (再任)

[目次に戻る ↗](#)

大学の  
動き

## 副理事が発令される

現副理事の任期満了に伴い、10月1日付けで副理事が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



桂キャンパス担当  
北村 隆行 (再任)



宇治・遠隔地キャンパス担当  
實 馨 (新任)

[目次に戻る ↗](#)

## 理事補が発令される

【任期：平成28年10月1日～平成29年3月31日】

研究担当 佐治 英郎 薬学系（大学院薬学研究科）教授（再任）

【任期：平成28年10月1日～平成30年9月30日】

総務担当 浅野 耕太 人間・環境学系（大学院人間・環境学研究科）教授（再任）

教育担当 飯吉 透 全学教員部（高等教育研究開発推進センター）教授（再任）

学生担当 石原 慶一 エネルギー科学系（大学院エネルギー科学研究科）教授（新任）

研究担当 北川 宏 純正化学系（大学院理学研究科）教授（再任）

教育担当 木南 敦 法学系（大学院法学研究科）教授（再任）

広報担当 桑原 知子 教育学系（大学院教育学研究科）教授（再任）

総務担当 酒巻 匡 法学系（大学院法学研究科）教授（再任）

国際担当 重田 眞義 地域研究学系（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）教授（新任）

財務担当 柴田 章久 統合経済学系（経済研究所）教授（再任）

教育担当 杉野目 道紀 工業化学系（大学院工学研究科）教授（再任）

施設担当 角 哲也 防災学系（防災研究所附属水資源環境研究センター）教授（再任）

研究担当 高橋 淑子 生物科学系（大学院理学研究科）教授（再任）

国際担当 立川 康人 地球工学系（大学院工学研究科）教授（再任）

国際担当 松田 文彦 基礎・社会医学系（大学院医学研究科附属ゲノム医学センター）教授（再任）

産官学連携担当 松原 英一郎 物理工学系（大学院工学研究科）教授（再任）

[目次に戻る ↗](#)

大学の  
動き

## 平成28年度総長杯（ディスクドッジ大会）を開催

9月2日（金）、9月9日（金）の2日間にわたり、総合体育館（メインフロア）において、平成28年度総長杯（ディスクドッジ大会）が行われました。今年度は、ソフトボール大会に変わる種目として、ディスクドッジ大会を開催しましたが、17チームのエントリーがあり、各チームの応援団も駆けつけ、おおいに盛り上がった大会となりました。

決勝戦は、「医学研究科」チームが、「数理解析研究所 with 北部構内事務部」チームを接戦で下し、見事に優勝しました。

試合終了後の表彰式では、山崎宏記 総務部人事課福利厚生室長より優勝、準優勝チームに賞品が授与されました。試合結果は次のとおりです。

優勝：医学研究科チーム（代表者：平松雄太）

準優勝：数理解析研究所 with 北部構内事務部チーム（代表者：山手章浩）



優勝した「医学研究科」チーム



準優勝した「数理解析研究所 with 北部構内事務部」チーム

（総務部（人事課））

[目次に戻る ↗](#)

## 熊本地震被災者救援義援金についてのご報告

本学では、熊本地震の震災による被災者の方々への救援、復興支援のために学内外に広く義援金の募集活動を行ってきました。これまで、教職員、学生、保護者、卒業生や元教職員など一般の方々を含む多くの皆さまからの温かいご協力をいただき、2,873,291円の義援金が寄せられました。

本学では、この善意による義援金を教育・研究活動を通じて本学と関係のある被災地の自治体にお渡しすることとし、理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センターが所在し、教育・研究の場として90年近くにわたり密接な関係を築いてきた南阿蘇村に全額を贈呈することとしました。

去る10月20日（木）、佐藤直樹 理事・副学長が南阿蘇村役場久木野庁舎を訪問し、長野敏也 村長に義援金の目録を手渡し、懇談を行いました。



義援金目録の贈呈

大学の  
動き

懇談では、住民の皆さんの生活状況や村周辺の道路、トンネル、橋などの交通インフラの復旧状況に加え、被災した火山研究センターの今後の復旧の見通しについても情報交換が行われました。

被災地の一日も早い復旧復興をお祈り申し上げますとともに、本義援金にご協力いただきました皆さまに心よりお礼申し上げます。

【関連リンク】

(総務部 (渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

## 第11回京都大学東京フォーラムを開催

「面白い (おもしろい) を探求する-わかる, ということ-」をテーマに、第11回京都大学東京フォーラムをパレスホテル東京で開催しました。出席者は約310名で、学外からは本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等に多く参加いただき、学内からは山極壽一 総長をはじめ、理事・副学長、監事、部局長等が出席しました。



挨拶する山極総長

本フォーラムでは、山極総長による挨拶の後、岩崎奈緒子 総合博物館館長が「世界の見方が変わるとき-東アジア世界から地球世界へ」と題して、また明和政子 教育学研究科教授が「相手の心が「わかる」ということ-その起源をたどる-」と題して講演を行いました。

続いて山極総長と稲葉カヨ 理事・副学長、岩崎館長、明和教授の4名により、「わかる, ということ」についてのパネルディスカッションを行いました。



講演会場の様子



パネルディスカッションの様子



講演する岩崎館長



講演する明和教授



パネルディスカッションを進行する稲葉理事・副学長(左)と山極総長

大学の  
動き

講演会終了後に実施した懇親会では、来賓の前川喜平 文部科学省事務次官，奥 正之 三井住友フィナンシャルグループ会長，竹内 譲 衆議院議員からそれぞれ挨拶がありました。

また、今回の東京フォーラムの開催に先行して、同日に経済界のトップで活躍する卒業生が結束して京都大学総長を応援しようという集まりである「京都大学鼎会」の第5回総会が約60名の出席者を得て開催され、今後の本学の発展に向けての意見交換などが行われました。

本フォーラムは、首都圏における本学の情報発信という目的に留まらず、出席いただいた各界で活躍されている本学関係者の結束を図るという効果を期待して実施しています。今後もこのような機会を継続的に提供し、本学のプレゼンス向上に努めていきたいと考えています。



懇親会会場の様子



挨拶する前川次官



挨拶する奥会長



挨拶する竹内議員

(総務部 (渉外課))

[目次に戻る](#)

## タイ科学技術フェア2016へJASTIP/京都大学として出展

バンコク近郊のインパクト・ムアントンターニー・エキシビション・アンド・コンベンションセンターにおいて、8月18日(木) から28日(日) までタイ科学技術フェア2016 (NATIONAL SCIENCE AND TECHNOLOGY FAIR 2016) が開催され、日ASEAN科学技術イノベーション共同研究拠点 (JASTIP) と京都大学ASEAN拠点が共同でジャパンパビリオンの一角に内閣府、宇宙航空研究開発機構、情報通信研究機構、日本学術振興会、東京大学、大阪大学などと並び出展しました。

本フェアはタイ科学技術省およびタイ国立博物館が主催し、例年100万人以上が来場する、科学技術に関するタイ最大級の催しです。タイ国内の研究機関や大学、企業パビリオンのほかに日本を含む、アメリカ、イギリス、ドイツなどが国際パビリオンとして出展しました。



JASTIP/ 京大ブース前での記念写真 (左から Thaweesak 長官, 佐渡島大使, Pichet 大臣, 柴山 守京都大学 ASEAN 拠点所長, 高木映 JASTIP コーディネーター)



「タイ科学技術フェア2016」オープニングセレモニーにて登壇する柴山拠点所長 (右から4人目)

19日(金)には、オープニングセレモニーが開催され、Pichet Durongkaveroj タイ科学技術大臣、Thaweesak Koanantakool タイ国立科学技術開発庁長官、佐渡島志郎 タイ駐節特命全権大使がブースを訪問されました。

(企画・情報部(企画課))

[目次に戻る ↗](#)

## 京都ASEAN フォーラム2016を開催

本学は9月8日(木)、9日(金)にマレーシア・クアラルンプールにて、京都ASEANフォーラム2016 - WINDOW to ASEAN: International and Innovative - を開催しました。ASEANおよび日本における研究・教育、社会連携を軸にした情報共有、意見交換および協議を通じて、今後のASEAN・京都大学・日本のアカデミアとの連携の在り方について模索しました。2日間にわたるフォーラムには、マレーシアを中心にASEAN7カ国および日本から延べ250名以上の参加がありました。

今回のフォーラムは、マレーシア在住の元留学生の同窓会である京都大学マレーシア同窓会(MYKYOTO) および日ASEAN科学技術イノベーション共同研究拠点(JASTIP)との共催、東南アジア教育大臣機構(SEAMEO)、アセアン大学連合(AUN)をはじめとするASEANおよび、在マレーシア日本大使館、文部科学省、科学技術振興機構(JST)、日立製作所をはじめとする日本の産官学からなる23機関の後援をいただきました。

初日は、<sup>トゥン アブドラー アハマド バダウィ</sup> Tun Abdullah Ahmad Badawi マレーシア前首相を来賓に迎え、<sup>モハド ユノス</sup> Mohd Yunus <sup>チャリエ チャリント</sup> Charlie Charingto マレーシア高等教育省審議官、宮川眞喜雄 在マレーシア日本国大使、稲葉カヨ 理事・副学長による開会の挨拶の後、山中伸弥 iPS細胞研究所長よりASEANの若手研究者向けへのビデオメッセージをいただきました。<sup>ヤン ベルホマット カイリー ジャマルディン アブ</sup> Y. B. Mr. Khairy Jamaluddin Abu <sup>ベイカー</sup> Bakar マレーシア青少年スポーツ大臣による開会挨拶と基調講演の後、山極壽一 総長、武田晴夫 日立製作所理事による基調講演が行われました。

閉会では、<sup>ムハマド ハキミ ホハド シャフィアイ</sup> Muhammad Hakimi Hohad Shafiai MYKYOTO会長、柴山 守 ASEAN 拠点所長、<sup>ダトク アブ ベイカー モハマド ディア</sup> Datuk Dr. Abu Bakar Mohamad Diah マレーシア科学技術イノベーション副大臣よりご挨拶をいただきました。



フォーラムの集合写真

大学の  
動き



フォーラムの来賓，基調講演者，主催者等代表の写真



交流会の集合写真

また，フォーラム前に，MYKYOTOとの交流会を開催しました。互いに親睦を深めながら情報交換を行い，有意義な時間を過ごしました。

(企画・情報部(企画課))

[目次に戻る ↗](#)

## 第54回近畿地区国立大学体育大会を開催

第54回近畿地区国立大学体育大会が5月8日(日)から9月1日(木)にかけて行われました。11大学・17種目にわたる競技で熱戦が繰り広げられ，本学は総合成績(男子)準優勝，総合成績(女子)5位の成績を残しました。

各選手は日頃の練習の成果を十分に発揮するとともに，他大学との交流も深め，充実した大会になりました。

総合成績(男子)	優勝	大阪教育大学	総合成績(女子)	優勝	大阪教育大学
	準優勝	京都大学		準優勝	京都教育大学
	3位	神戸大学		3位	大阪大学

【第54回近畿地区国立大学体育大会ホームページ】

<http://www.kinkoku.jp/>



女子バスケットボール部の試合  
(本学は紺ユニフォーム)



柔道部の試合(本学は赤帯)



男子バスケットボール部の試合  
(本学は白ユニフォーム)

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の  
動き

## 全学教育シンポジウム「データと理想にもとづいて考える京大の教育改革－入試から大学院教育まで」を開催

9月9日(金)、桂キャンパス「船井哲良記念講堂」を会場とし、教職員等240名の参加を得て、「データと理想にもとづいて考える京大の教育改革－入試から大学院教育まで」をテーマとする全学教育シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、参加者が教育について全学的な議論や意見を交わすことにより共通理解を深め、今後の教育の改善・充実に資するとともに、部局の枠を越えた教職員の交流の場となることを目指して、平成8年から開催しており、今回で20回目となります。

午前の部は、北野正雄 理事・副学長による「京都大学が直面する課題と教育改革の方向性」と題した基調講演の後、京都大学の大学院教育における先駆的・特色的な取組について、博士課程教育リーディングプログラムやダブル・ディグリープログラムなど、幾つかの研究科やプログラムから報告がありました。

午後の部は山極壽一 総長から、「京都大学の教育体制を世界の大学のデータから展望する」というテーマで基調講演を行っていただきました。講演に引き続き、教学IR(教育についての組織的な調査分析)の基本的な考え方や方法について話題提供があり、本学においてデータにもとづいた教育改善にこれまで取り組んでいる幾つかの部局からの実践の成果や現状に関する報告がありました。さらに、今後の本学における教学IRの可能性、課題や展望等について、パネルディスカッションを行いました。

今回のシンポジウムを通じて、現在の取り組みの改良、新たな取り組みの企画など、様々な形で活かされることを期待します。



北野理事・副学長の基調講演



山極総長の基調講演



講演する飯吉理事補



パネルディスカッションの様子

(教育推進・学生支援部(教務企画課))

[目次に戻る](#)

大学の  
動き

## 「京都大学オープンキャンパス2016」を開催

京都大学オープンキャンパスを、「知はもっとダイナミックで刺激的だ」をメインテーマに、8月9日(火)・10日(水)の2日間開催しました。猛暑の中、今年度も多くの中高生、保護者らの参加がありました。

百周年時計台記念館百周年記念ホールでは、酒井啓亘 オープンキャンパス委員会委員長(大学院法学研究科教授)による司会

のもとオープニングセレモニーを行いました。山極壽一 総長による「京都大学を目指す皆さんへ」と題する講演があり、参加者は皆、熱心に耳を傾けていました。続く京都大学応援団による演舞では、力強い演舞・演奏とユーモアも交えたエールが送られ、会場内は大いに盛り上がりしました。その後、「在学生からのメッセージ」では、経済学部と大学院農学研究科の先輩から自らの受験体験や大学生活について参加者に語りかけました。



百周年時計台記念館周辺の様子



山極総長の講演



応援団による演舞



学部説明会



学部紹介コーナー



学部相談コーナー



施設見学



相談コーナー

また、9日には総合人間学部・文学部・医学部医学科・医学部人間健康科学科・薬学部・農学部、10日には教育学部・法学部・経済学部・理学部・工学部がそれぞれ学部説明会を行い、学部長等による歓迎挨拶の後、学部の紹介や模擬授業、体験学習、研究室訪問など各学部の様々な企画に参加者は満足気な様子が見られました。

キャンパスツアー、在学生交流コーナー、相談・資料コーナー、本学教員による講演会、在学生によるサークル紹介などの企画や、今年新たに設けられた学部紹介コーナー、教員著書・ポスター展示を企画し好評を得ました。また、附属図書館、総合博物館、百周年時計台記念館

展示ホールの見学も盛況で、2日間とも

キャンパス内が多くの参加者で賑わいました。

受験生の志望校選びにオープンキャンパスはますます重要なものになっています。今回のオープンキャンパスへの参加を通して、本学の雰囲気や魅力を十分に感じていただき、入学への意欲を一層高められたことと期待しています。

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る](#)

大学の  
動き京都大学サマースクール 2016  
「暑い夏の1日、京大生になろう！」を開催

本学との連携協定に基づく高大連携事業として、本学主催で「京都大学サマースクール 2016」を、8月19日(金)に吉田キャンパスで開催しました。対象は、大阪府・滋賀県・兵庫県・京都府・京都市・和歌山県・三重県・東京都・石川県・徳島県・徳島市・福井県教育委員会および奈良県における連携指定校の高校生です。

本企画は、高校生の皆さんが研究の最先端に触れることにより探究心を育て、知的創造力が向上することを目指して、本学と高等学校が協力して教育支援を行うことを目的としています。

また、普段接することのない他府県の生徒たちが一堂に会して、模擬授業を通じて意見交換することにより、相互に知的刺激を受け、切磋琢磨する機会を設けました。

今年度の模擬授業では、各学部および研究所・センターの協力を得て、文系理系あわせて30テーマを開講しました。受講者は78校・1,174名となり、キャンパスは多くの高校生でにぎわっていました。参加した高校生からは、「知識だけではなく、考えて人とシェアする機会があっておもしろかった」、「オープンキャンパスに参加できなかったが、京都大学での学びや雰囲気に興味を持った」、「大学はとてもおもしろく、自分のやりたいことを見つけられる場であるということが分かった」、「講義の内容も鳥肌が立つほど良かった」、「参加してみて意欲が湧いてきたし、特色入試がとても魅力的に感じられた」といった感想が多数寄せられました。



模擬授業の様子

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の  
動き

## ウイルス・再生医科学研究所が発足

本学では、10月1日(土)に再生医科学研究所とウイルス研究所を統合し、ウイルス・再生医科学研究所を設置しました。10月3日(月)に、湊 長博 理事・副学長, 開 祐司 ウイルス・再生医科学研究所所長, 小柳義夫 ウイルス・再生医科学研究所副所長, 河本 宏 ウイルス・再生医科学研究所副所長が出席し、新研究所設置記念除幕式を行いました。

これまでのES細胞株の樹立やiPS細胞の発見などを代表とする再生医科学研究と成人T細胞白血病の原因ウイルスの発見などを代表とするウイルス研究を融合し、新たな先端的生命医学分野の創出を目指し、新研究所を設置しました。

新研究所は、これまでの研究を発展させるとともに、新しい学問分野の創出と多様化する社会の要請に応える教育研究活動を推し進めます。



(ウイルス・再生医科学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

## 「寮費3倍化値上げ反対」 運動の思い出

尾藤 廣喜



私が京都大学法学部に入学したのは、1966年でした。当時父は自営業者でしたが、病弱のため十分な収入がなく、私は、自分の生活を自分で支えるほかに、日本育英会の特別奨学金（当時月額8,000円）と家庭教師のアルバイトなどで生活していました。当然、下宿はできず、熊野寮に入寮することになりました。

熊野寮は、1965年にできたばかりの新寮で、寮費は、吉田寮（旧寮）が月額100円、熊野寮は月額300円でした。当時そして今でも京都大学では、寮が学生の自主管理でしたので、入寮すぐの「寮生大会」で、この寮費問題が議論されました。寮委員会の提案は、「本来寮の費用は、大学当局、ひいては文部省当局が負担すべきものであって（負担区分）、月額100円でも負担すべきではない。新寮になって、100円を300円に3倍化することは認められない。我々は寮費不払いで対抗しよう。」というものでした。私をはじめ少なくない人数の者は、「下宿生の下宿代は1畳1,000円が平均。新寮の月額300円は高くない。寮費3倍化の主張は、本質を歪める主張である。」と反論しましたが、「負担区分の本質が分かっていない」として、圧倒的多数で、寮費不払いが決議されました。私は、不満であっても、決定には従わざるを得ず、結局は「不払い」に同調することになりました。これに対して、大学では、「寮費不払いの状況では、大浴場の湯を沸かさない。」との対応措置をとり、風呂に入れられない状態になったため、寮生全員が近くの銭湯に入浴に行くという笑えない事態になりました。当時の入浴料が、確か32円だったと思いますので、毎月寮費の差額200円の約4.5倍の負担をしていたこととなります。

そして、この寮費問題がきっかけで、1969年1月16日、寮委員会による学生部封鎖の日を迎えます。委員会は、①負担区分撤廃、②完全自主管理による無条件増寮などの要求を掲げて奥田東総長（当時）らと団交を行っていましたが、決裂。突然建物を占拠、封鎖したのです。私は、寮内の議論も、何らの決議もないままの実力行使に怒り心頭でした。この学生部封鎖が、京大紛争の出発点になります。しかし、京大紛争では、「個別闘争から大学の存立基盤そのものを問う闘いへ」「資本主義社会における教育の意味を根源的に問う闘いへ」と要求内容がエスカレートし、いつしか寮費問題は置き去られてしまいました。

私は今弁護士として、貧困問題に精力的に取り組んでいます。大学の授業料の高額化、高利の奨学金など高等教育の多額の費用負担が、「若者の貧困」の大きな原因となっていることからすれば、当時の教育の場の「負担区分の明確化」が非常に重大な問題提起であったことは事実です。また、社会保障制度における公的責任の明確化が、制度の根本のあり方を問うものであることも明らかです。しかし、あれから半世紀近く経った今、当時の「闘争方針」が、現実を見ず、市民の理解と支持を求めない一人よがりの運動で空中分解してしまった轍は、絶対踏まないと決意しています。

（びとう ひろき 鴨川法律事務所 弁護士 昭和45年法学部卒業）

[目次に戻る ↗](#)

## 随想

21世紀の課題：優しい地球・  
社会環境を

名誉教授 笠原 三紀夫



20世紀、特に第二次世界大戦後の20世紀後半には、科学技術はかつて経験したことのないめざましい発展をとげた。例えば、医療・生命科学の進歩は人間の寿命を飛躍的に伸ばし、交通機関の発達は行動範囲を地球の隅々にまで広げ、とりわけコンピュータ・情報通信技術の発展はめざましく、莫大な計算を正確かつ超短時間に行い、膨大な情報を収集・処理するとともに、瞬時に世界中の人々との情報の共有や交換を可能にした。

このような20世紀の科学技術の急進展により、経済・産業は急速に発展し、人々（といっても主として先進国を中心とした人々であるが）は、物質面での豊かさを満喫し、便利で快適な生活を享受してきた。しかしながら、この20世紀の象徴ともいえる科学技術の進展や経済の急成長、物質的な豊かさは、大量生産・大量消費・大量廃棄を前提としたものであり、それはエネルギーの大量消費とともに、地域の環境汚染や地球環境の破壊、資源の枯渇、また廃棄物の大量発生といった負の遺産をももたらした。

一方21世紀に入り、社会や環境を脅かす最も大きな要因として、戦争・紛争・テロと気候変動が顕著となった。核兵器、生物・化学兵器、ミサイルなどは大量破壊の道具として使われ、地球規模に及ぶ環境・文化・社会・人権を破壊し、兵器の生産や使用、また破壊されたものの復興等をも考慮すれば、それらに要するエネルギー量、CO<sub>2</sub>排出量等は計り知れない莫大な量となる。戦争やテロは、人の生命を奪うばかりでなく、まさしく「最大のエネルギー浪費、最大の環境破壊を引き起こす」ことを肝に銘じたいものである。

年々激しさを増す気温上昇や海面上昇、強力な台風や暴風、頻発するゲリラ豪雨といった気候変動は、CO<sub>2</sub>をはじめとした温室効果ガス濃度の上昇による地球温暖化が原因といわれており、その大部分は化石燃料の燃焼に伴うものであることから、エネルギー環境学を担当してきた筆者にとって、地球温暖化対策問題は定年退職後10年以上経過した現在においても最大の関心事といえる。

2011年3月11日に東日本一帯で大地震・巨大津波が発生し、住民や地域に大被害をもたらすとともに、福島第一原子力発電所の原子炉重大事故の原因となった。その結果わが国のエネルギー事情、エネルギー政策は大きく変化し、CO<sub>2</sub>削減対策にも大きな影響を及ぼし、京都議定書提案国としての指導的役割は大きく後退したように思われる。

CO<sub>2</sub>やメタン、フロンなどの温室効果ガス量は一般に、温暖化係数を考慮したCO<sub>2</sub>換算量として表され、CO<sub>2</sub> xx億トン、xxkgなどと表現されている。温室効果ガス削減に対する人々の意識が低い原因の一つに、億トンやkgがどれくらいの量であるかを実感できないことにあるのではないかと考える。次の2つの問題「CO<sub>2</sub>量を実感できますか?」を通し、CO<sub>2</sub>量を若干なりとも実感していただければ幸いである。

問題1. CO<sub>2</sub> 1m<sup>3</sup>はどのくらいの重さと思いますか?

- ① お米1粒程度(0.018g), ② りんご程度(500g), ③ メロン程度(1.8kg)

## 随想

問題2. ガソリン1ℓで約10km走ったとき、小学校の教室(体積約200m<sup>3</sup>)に存在するCO<sub>2</sub>量を基準にすれば、どのくらいのCO<sub>2</sub>を排出すると思いますか?

- ① 小学校の1教室と同程度, ② 同5教室分, ③ 同10教室分, ④ 同15教室分

ところで、戦後のめざましい高度経済成長を背景に、大型建造物である鉄道や道路、空港、ダムなどが次々と建設され、社会基盤整備が進み安全で快適な社会を築くとともに、雇用を生み出し日本の経済を支えてきた。一方、これらの建設においては、多大な税金が投入され、大量のエネルギーを消費し、環境破壊の原因ともなってきたことから、建設に反対する事案も少なくなかった。そのような中で、事業を成立させるための、計画段階での「過大な需要予測」と「経費の過小な見積り」が多々指摘されてきた。利用者が予測の10%に満たないピーチライナー、交通需要が50%に満たないアクアライン等々、過大な需要予測は半端でない。予測を担当したある機構長は、「建設を進めたい国の意図に配慮し、また地元業者の期待を裏切らないようにするため、過大な数字を出してしまう現実がある」と述べている。また、経費の過小な見積りについては、反対を避けるためにも過小に評価する傾向がある。過大な需要予測・過小な経費の見積りによりマスタープランが正当化され、事業化が承認され工事が終了し、いざ供用化されると、需要も経費も予測とは大きく異なることが判明する事例は少なくなく、需要・経費予測に対する社会的信頼が大きく揺らいでいる。現在まさに、次々と明らかとなる競技会場の建設費の増大をはじめ、当初7,300億円といわれた総予算が2～3兆円へと3～4倍に膨れ上がる東京オリンピック・パラリンピックも例外ではない。

今後日本の人口は急激に減少し、21世紀末には現在の人口1億2700万人が4,800万人程度にまで減少し、とりわけ生産年齢人口は現在の7,660万人が約2,370万人へと70%近く減少すると推定されており、労働力不足が大きな問題となろう。現在の人々の欲望を満たすための計画が、エネルギーを多量に消費し、環境を破壊し、さらには経済的にも社会的にも人材的にも将来の人々に大きなツケを回し、老朽化した施設の維持・管理を一方向的に押し付けるのでは、Sustainable Developmentの精神に大きく反することになる。将来世代へ「優しい地球・社会環境」を引き継ぐための努力を続けたいと考えている。

[答 問題1.  $1\text{kmol} = 44\text{kg} = 24.0\text{m}^3$  (at 20°C, 1atm) より③, 問題2. ④]

(かさはら みきお 平成17年退職 元エネルギー科学研究科教授  
専門はエネルギー環境学)

[目次に戻る ↗](#)

## 洛書

## 10 Years of iPSCs

吉田 善紀



今年でマウスiPS細胞の樹立が報告されてから、10年になります。

私はいまiPS細胞研究所の未来生命科学開拓部門でiPS細胞からの心筋細胞・血液細胞の分化成熟のメカニズムの研究を行っています。大学を卒業し北九州の小倉記念病院で臨床医として勤務したのち、2002年に大学院生として京都大学へ戻りました。大学院では北徹循環器内科教授の講座で、長谷川浩二・田中誠両先生の指導のもと心臓の発生の研究を行いました。マウスのES細胞を扱ったときのことで、ES細胞をしばらく分化誘導していると、拍動する心筋細胞が出現することに大変な驚きを感じたことを今も鮮明に覚えています。顕微鏡の中で細胞が動いている、というのは大変衝撃的なものでありました。また、目の前で起こっている細胞の劇的な変化がどういうメカニズムで起こっているのか知りたく強く感じたのを覚えています。

その後、2008年に京都大学再生医科学研究所の山中研究室にてiPS細胞の研究を始めました。ちょうどヒトiPS細胞の樹立の論文が「Cell」に出版された直後で、世間からの期待と興味が集まってきた時期でした。それから、この分野の研究は急速に発展しました。iPS細胞研究センターが設立され、そして2010年にはiPS細胞研究所が設立され5階建ての新しい研究所に移りました。研究所開所当時は百数十人のスタッフで空き部屋もある状態でしたが、数年で席が足りない状態になりました。私自身の研究内容も、当初はiPS細胞を効率よく樹立する方法の研究を行っていましたが、心筋細胞や血液細胞への分化能という観点からiPS細胞を評価し細胞株によって分化能が異なるメカニズムを探求するプロジェクト、そしてiPS細胞から分化した心筋細胞・血液細胞を「いかに応用するか」に焦点を絞った研究にシフトしています。

この研究のスピードは非常に速く競争が激しいため、自分が取り組んでいるテーマが他の研究者に先行されてしまったり、あっというまに陳腐化してしまったりすることもしばしばあります。それでもなお、このiPS細胞研究のフィールドは、研究者の想像力をかきたてる夢にあふれた領域だと思います。

よく研究者はプレゼンテーションが研究自体と同じくらい重要だといわれています。特に海外留学経験のない私にとっては、海外の研究者へのプレゼンテーションやコミュニケーションのための英語力は特に重要な課題です。この春から、ドイツからの留学生が私たちの研究室に参加してくれています。これを機に、研究室のミーティングを日本語から英語に変更しました。来年からは台湾から大学院生が入学予定です。世界の研究者と言葉や国の壁をつくらず、活発な意見交換ができる環境をつくることで、ストレスをお互いに感じることなく研究を進められるような研究室をつくっていきたくと思っています。

(よしだ よしのり iPS細胞研究所准教授 専門は循環器内科学, 幹細胞生物学)

[目次に戻る ↗](#)

## 話題

## 社寺見学会を実施

10月22日(土)、平成28年度京都大学社寺見学会『初秋の南山城をたずねて』が行われ、51名が参加しました。当日の天候は曇りで、肌寒い気温となりましたが、酬恩庵一休寺(京田辺市)、岩船寺(木津川市)、当尾石仏巡り(木津川市)、浄瑠璃寺(木津川市)を巡り、参加者は、それぞれの専門分野の講師の解説を興味深げに聞いていました。

酬恩庵一休寺では庭園を眺めながら歴史などを学び、岩船寺では三重塔を拝観しました。また、岩船寺から石仏巡りをしながら浄瑠璃寺まで移動し、浄瑠璃寺では美しい庭園とともに国宝である四天王立像などを拝観しました。

当日、解説いただいた講師は次のとおりです。

(歴史) 西山 良平(大学院人間・環境学研究科 教授)

(建築) 山岸 常人(大学院工学研究科 教授)

(造園) 柴田 昌三(大学院地球環境学堂 教授)

(美術) 根立 研介(大学院文学研究科 教授)



浄瑠璃寺の庭園にて記念撮影(1号車)



浄瑠璃寺の庭園にて記念撮影(2号車)

(総務部(人事課))

[目次に戻る](#)

## 第20回リカレント教育講座「『心の教育』を考える— 発達障害の理解と対応—」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、年1回、教育相談活動に携わる専門家(幼・小・中・高校教諭、養護教諭、心理臨床専門家等)を対象に、研修活動の一環として、リカレント教育講座を開催しています。不登校、非行、いじめ、発達障害など、現在の教育現場で大きな問題となっている現象を通じて、子どもの心や教育について深く考えることをねらいとしており、毎年、全国から熱心な教師や臨床心理士等専門家の参加を得ています。

第20回となる今回は「発達障害の理解と対応」を全体テーマとして、8月21日(日)に開催し、73名が受講されました。午前には、様々な形で「発達障害の理解と対応」に向き合っておられる臨床心理士・精神科医師・小学校教諭の3名をシンポジストに迎えてシンポジウムを行い、午後には分科会に分かれて事例研究を行いました。

シンポジウムでは、3名のシンポジストがそれぞれ、発達障害の理解と対応について、災害時において発達障害児・者の抱える困難、医療的観点からみた理解、学校現場におけるチーム支援の実際というような、幅広い視点からお話いただきました。事例研究では、教育現

話題

場における個別事例を素材として受講生と講師が活発に意見を交わしました。参加者からは、「学校現場にいただけでは得られない知見を多く得られました」「事例を聞く機会が少ないので貴重でした」などの感想が寄せられ、大変好評でした。「このような場を毎年設けていただき、ありがとうございます」という声も多くいただいております。来年度以降も本講座を引き続き開催していく予定です。



シンポジウムの様子

(大学院教育学研究科)

[目次に戻る](#)

## 大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座『母子関係と創造性—ウィニコット理論から「受胎告知」を理解する—』を開催

臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人のこころの理解に主眼をおいた公開講座を開催しています。

今年度は、センター客員教授で英国精神分析協会訓練分析家・スーパーヴァイザーのジャン・アブラム氏を講師として、10月2日（日）の午後1時から、京都テルサ B・C会議室で行い、心理臨床家や医療従事者、教育関係者、学生など約70名の参加がありました。

講演では、第1部において「受胎告知」の場面が描かれた宗教画と、現代の芸術家であるリノ・マノッチの作品が紹介され、そこに共通して描かれているテーマについて解説されました。第2部においては、精神分析家のウィニコットの母子関係についての理論が紹介された後、第1部で紹介された作品群に表れているテーマと、精神分析をはじめとした心理臨床実践において、セラピストとクライアントとの間に起こっていることの共通性について論じられました。指定討論では、主に実践におけるセラピストとクライアントの関係性について、講演内容を基にさまざまな視点から議論がなされました。参加者の感想からは、普段にはな



公開講座の様子

い視点からの講演に刺激され、考えが深まったり、さまざまな連想をかきたてられたりするような機会となっていたことがうかがわれました。

本講座は例年参加者から大変好評を得ており、来年度以降も、現代社会の複雑なこころの問題を理解するための視点を一般市民に向けて広く提供できる場となるよう開催していくことを考えています。

(大学院教育学研究科)

[目次に戻る](#)

話題

## 第3回博士課程リーディングプログラムオールラウンド型7大学シンポジウム (AR7シンポジウム) を開催

グローバル社会を牽引するトップリーダーの養成を目指す博士課程リーディングプログラムオールラウンド型採択大学は、全国で7大学（京都大学、大阪大学、慶應義塾大学、東京工業大学、名古屋大学、東京大学、九州大学〈採択順〉）あります。この7大学の教職員・学生が集まり、9月15日（木）、芝蘭会館において第3回のAR7シンポジウムを開催しました。

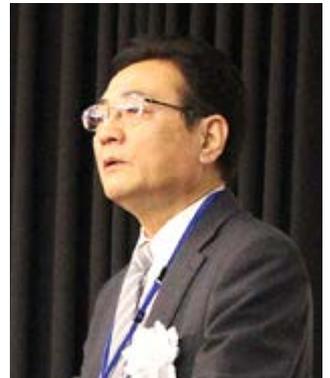
今回のシンポジウムでは、「大学が育成するオールラウンド型人材と産・官・国際機関が期待するグローバル・リーダー人材とは」をテーマに、様々な立場からの提言や意見交換を行いました。

まず、当番校である本学を代表して湊 長博 理事・副学長（総長代理）から「活発な意見交換を期待する」との挨拶があり、引き続き義本博司 文部科学省官房審議官（高等教育局担当）からリーディングプログラムの現状や今後の方向性などを含めたご挨拶がありました。

次に、基調講演1では、産業界を代表して堀場 厚 株式会社堀場製作所代表取締役会長兼社長から、「企業がグローバル人材・リーダー人材に期待するもの」と題して、堀場製作所の人事政策の紹介と企業における博士課程修了者に望む役割、在学中における心構えなど、一流企業のトップとして非常に示唆にとんだ講演をいただきました。

基調講演2では、国際機関を代表してンプリ・チャールズ・ポリコ 国連食糧農業機関（FAO）駐日所長から、「国際機関が求めるリーダー人材」と題して、ご自身が今までに選択された重要な決断や国連機関で仕事をするうえで日本人に期待することなどが述べられました。

続いて、各大学リーディングプログラムの修了生・履修生から、「各プログラムにおける人材育成の実際」について具体的な発表がありました。本学思修館プログラムからは、山脇 大 思修館5年生が「思修館における履修の現状と成果（海外武者修行とPBLを中心に）」、岩崎総則 思修館5年生が「グローバル人材とは何か？ -海外で「武者修行」してわかったこと」と題



湊理事・副学長による開会挨拶



義本審議官による来賓挨拶



堀場会長による基調講演



思修館5年生山脇氏の発表



思修館5年生岩崎氏の発表



ポリコ所長による基調講演

話題

する発表をそれぞれ行いました。2人の発表は、義本審議官や他のリーディングプログラムコーディネーターから高い評価を受けました。

次に、パネルディスカッションを行いました。川井秀一 思修館プログラムコーディネーターをモデレーター、基調講演をいただいたポリコ所長、西沢利郎 東京大学特任教授、杉山直 名古屋大学プログラムコーディネーター、佐藤 勲 東京工業大学プログラムコーディネーター、東島 清 監事をパネリストとして、「大学が育成するオールラウンド型人材と産・官・国際機関が期待するグローバル・リーダー人材とは」をテーマに意見交換を行いました。フロアからも意見が出されて活発な意見交換が行われ、最後には今後情報交換を行う組織として「AR7大学連絡会」を設けることが満場一致で決定されました。

最後に、北野正雄 理事・副学長から、次回のAR7シンポジウムではさらに実りある議論ができることを期待するとともに、参加者の活躍を祈念するという挨拶があり、盛況のうちに終了しました。



パネルディスカッションの様子



北野理事・副学長による閉会挨拶

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る ↗](#)

## 思修館国際セミナーを開催

大学院総合生存学館(思修館)は、世界経済フォーラムクリスタルアワード受賞者を招いたスポーツ・文化・ワールド・フォーラム(文部科学省主催、京都府・京都市等共催)のために京都に来られた機会を利用し、南アフリカ共和国ご出身の映画監督・プロデューサーであるアナント・シン氏を招聘し、思修館国際セミナーを10月18日(火)18時から思修館ホールにて開催しました。シン氏は、多くの社会派映画を作製し、社会に対してメッセージを発信し続けています。

同氏は今回の講演では、「南アフリカの歴史と社会的正義」というタイトルのもと、南アフリカ共和国の元大統領、ネルソン・マンデラ氏の自伝を映画化した「マンデラ」の製作に至るまでの過程、ご自身の経験や歴史的観点から同国の社会的矛盾について話されました。



川井秀一総合生存学館長の挨拶



講演「南アフリカの歴史と社会的正義」

話題

質疑応答では、同国に生まれたインド人3世としてのアイデンティティについてもお話いただき、同氏の真髓となる思考の形成についても示唆されました。また、シン氏は、一国が抱える問題の大半は、多くの国が抱えている共通した社会問題であり、こうした問題をどう捉え、対処していくのか関心を持ち続けることがいかに重要であるかを指摘されました。



質疑応答の様子

講演を通じて、マンデラ大統領の偉業やリーダー像を再認識すると同時に、確固たる信念を持って社会に対してメッセージを発信し続けるシン氏の姿は、グローバル課題解決に取り組む学生にとっては強い刺激になったと思われます。

講演終了後は場所を移し、ドリンクを飲みながらフリートークを行いました。参加した学生たちは積極的にシン氏に話しかけ、帰られる時間になっても話は尽きず、シン氏は参加者1人ひとりに握手をし、感謝の言葉を述べて会場を後にされました。



ドリンクを飲みながらのフリートーク 積極的にシン氏に話しかける学生 参加者一人ひとりと握手

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る ↗](#)

## 桜島新観測坑道竣工記念式典を開催

8月29日(月)、国民宿舎レインボー桜島(鹿児島市)にて、防災研究所附属火山活動研究センター桜島新観測坑道竣工記念式典を開催しました。

今回竣工したのは高免(こうめん)観測坑道です。桜島ではすでに、ハルタ山観測坑道(1985年竣工)と有村観測坑道(2006年竣工:国土交通省管理)において精密地盤変動観測が行われており、高免観測坑道は桜島における3つめの観測坑道となります。今後は、これら3つの観測坑道で得られたデータを複合的に解析することによって、より確度の高いマグマの動態把握と火山噴火の早期警戒が可能になります。ひとつの火山に3つもの観測坑道を持っているのは世界でも桜島だけです。そのことは近い将来に予想されている大規模噴火への対応が、緊急の課題であることを示しています。

記念式典には約90名が出席しました。寶 馨 防



記念式典の様子



寶防災研究所長による祝賀会挨拶

話題

防災研究所長と清木孝悦 理事による式辞につづいて、来賓の保岡興治 衆議院議員，森 博幸 鹿児島市長，牛尾則史 文部科学省研究振興局学術機関課長からの祝辞，新坑道の建設にあたった工事業者への感謝状贈呈を行いました。その後，井口正人 火山活動研究センター長が，桜島の火山活動状況および新坑道の概要と設置の意義について説明しました。

記念式典終了後には，出席者はバスに分乗して，記念式典会場から桜島をおよそ半周した鹿児島市高免町にある新坑道を訪れ，火山活動研究センタースタッフの案内で新坑道とその中に設置されている水管傾斜計や伸縮計などの観測機器を見学しました。



桜島の活動状況について報告する井口 火山観測研究センター長



防災研究所教職員が出席者の方々に新坑道・高免観測坑道の内部を実地に案内



晴れ渡った空と桜島を背景に式典出席者一同で記念撮影

(防災研究所)

[目次に戻る ↗](#)

## バヌアツ共和国タンナ島の在来建設技術の高度化を支援する JICA 草の根事業を開始

防災研究所は JICA（独立行政法人国際協力機構）との業務委託契約に基づき，JICA 草の根技術協力事業「バヌアツ共和国タンナ島における在来建設技術の高度化支援」（事業実施代表者：西嶋一欽 防災研究所准教授）を始動しました。サイクロンが多い南太平洋に位置するバヌアツ共和国では近年，同国古来の伝統的な建物がサイクロン襲来時に避難場所として活用されています。本事業はそうした伝統建築の耐風性能の向上を目的として実施されます。

防災研究所および地球環境学堂の研究者を中心とする本事業の推進グループは，9月22日（木）～23日（金）にかけてバヌアツ共和国でキックオフミーティングを開催し，現地カウンターパートであるタンナ島 Lume's RTC（Rural Training Center）およびバヌアツ教育省の関係者らと本事業



バヌアツ教育省長官らとの会議



Lume's RTC 関係者ならびに周辺村落の長たちとの会議

## 話題

業への期待や推進について意見交換しました。

防災研究所では平成27年3月にバヌアツ共和国を襲ったサイクロンパムの被害調査およびタンナ島における在来建設技術に関する現地調査をそれぞれ、バヌアツ気象災害局、南太平洋大学の研究者と合同で実施していました。現地調査を通じて、タンナ島には在来建設技術を中心にした在来知に基づくサイクロン対策が存在していること、これらの対策が国外からの建設技術の導入により失われつつあること、外来建設技術の導入が必ずしも減災には結び付いていないことなどが明らかになりました。こうした調査結果をうけ本事業では、バヌアツ共和国の気候風土の中で受け継がれてきた建築物に遺る文化的特徴をそのまま温存しながら、そこに工学的知見を加えて改良し、伝統建築がサイクロン時のシェルターとして現地村落の減災によりいっそう寄与することを目指しています。

キックオフミーティングではバヌアツ共和国が自身の文化や伝統をベースにした社会、環境、経済の開発を進めようとしていること、ならびに同国政府が描く教育システム改革における本事業の位置づけを再確認しました。西嶋准教授らの事業推進グループは、本学が有する科学的な知見を活かして、タンナ島に根付いている在来知が有する自然災害対応力を工学的に再評価し、現地の文化や伝統を継承しながら在来建設技術を高度化するタンナ島Lume's RTCの活動を支援します。

## 【関連リンク】

<http://www.gea-lab.ges.kyoto-u.ac.jp/news.html>

[http://dailypost.vu/news/advancing-vernacular-construction-on-tanna/article\\_93fed8cf-ca8d-58ae-8c9b-5e7a60ab421a.html](http://dailypost.vu/news/advancing-vernacular-construction-on-tanna/article_93fed8cf-ca8d-58ae-8c9b-5e7a60ab421a.html)



地元で手に入る建材で建てられたタンナ島の伝統建築物



コンクリートの瓦礫が撤去されな  
いままになった小学校

(防災研究所)

[目次に戻る ↗](#)

## 高等教育研究開発推進センター 大学生研究フォーラム 2016 を開催

8月25日(木)、百周年時計台記念館において、高等教育研究開発推進センターおよび電通育英会、東京大学大学総合教育研究センターとの共催により、「大学生研究フォーラム2016」を開催しました。

「経験で終わるな、メタに上がれ!」というテーマのもと開催された本フォーラムは、村上正行 京都外国語大学マルチメディア教育研究センター教授の開会宣言・趣旨説明、中原 淳 東京大学大学総合教育研究センター准教授、溝上慎一 高等教育研究開発推進センター教授による講演に続き、飯吉 透 高等教育研究開発推進センター長、森 隆一 電通育英会理事長より主催者挨拶がありました。

午後のセッションにおいては、須田 淳 大学院工学研究科准教授、明和政子 大学院教育学研究科教授、安藤直人 昭和電工株式会社総務・人事部事業支援グループマネージャー、

話題

松本加奈子 大阪ガス株式会社大阪ガス行動観察研究所研究員より大学・企業双方の立場からの事例報告後、参加者同士による討議が行われました。

フォーラムの最後には溝上教授が統括講演を行い、9年間にわたる取り組みの展開と今後の課題を紹介しました。

この大学生研究フォーラムには、大学関係者、企業内人事教育関係者、大学生・大学院生、高校教員等、学内外から計331名の参加者があり、活発に意見交換を行うなど、盛会のうちに終了しました。



講演の様子



会場の様子

(高等教育研究開発推進センター)

[目次に戻る](#)

## 第9回次世代グローバルワークショップを開催： 共同学位を見据えて

今年も恒例となった次世代グローバルワークショップが“Transcultural Dynamics of Asia and Europe: Mobility, Negotiation and Transformation”と題して9月26日(月)～27日(火)に開催されました。第9回となる今回は、現在ハイデルベルク大学 Centre for Transcultural Studies (HCTS) との国際連携文化越境専攻(修士課程)における共同学位の設置申請を予定していることから、文化越境への関心の高まりを受け開催されました。すでに同大学とは2015年10月から、学生交流協定による単位互換制度を発足させ、学生や教員の往来も盛んになっています。

こうした背景から、今回のワークショップは2大学による協働のラウンドテーブルとワークショップの2本立てとしました。ラウンドテーブルではMonica Juneja ハイデルベルク大学教授による「文化越境研究：人文科学における方法論の観点から」と題



ラウンドテーブル



研究員による研究報告



大学院生による研究報告



全体ミーティング

した基調講演をはじめ、Sophie Roche 同特定准教授、Irina Holca 本学人文科学研究所講師が講演を行いました。続いて、Introduction to Transcultural Studiesの授業を担当したBjorn-Ole Kamm 学際融合教育研究推進センター特定講師をはじめ4名の教員と学生が、本学で授業を開講した経験に基づいて展望や課題について議論しました。

ワークショップでは世界17の国や地域から、大学院生など33名が報告を行いました。また、大学教員によるコメントも充実し、報告者からは「教員によるコメントが今後の研究を進めるうえで大変役立つ」といった意見が出されました。

本ワークショップは、グローバルCOE（親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点）の活動を引き継ぎ、本学アジア研究教育ユニット（KUASU）が実施している事業です。来年度は第10回の開催になりますが、ワークショップの参加者からはナショナリズムや移動についてのテーマを、という希望が出されました。



集合写真



Holca先生による基調講演



Roche先生による基調講演

(学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット)

[目次に戻る](#)

## グローバルサイエンスキャンパス ELCAS 平成28年度国際クラスベトナム研修を実施

高大接続科学教育ユニット「科学体系と創造性がクロスする知的卓越人材育成プログラム(略称ELCAS)」の一環で、地球環境学堂が主催する国際交流科目の協力のもと8月10日(水)～17日(水)にかけて、ベトナム研修を実施しました。ELCAS受講生12名、京都大学の教職員2名、本学学生1名が参加しました。

研修初日・2日目のホーチミン市では、統一会堂・戦争証跡博物館を訪問し、ベトナム戦争の歴史や今もなお残る傷跡について研修を受けました。3日目以降フエ市では、クオック・ホック高校、フエ農林大学の学生と実習を共に行い、交流を深めるとともに異文化理解を進めることができました。山間部に位置するHong Ha村では京都大学・フエ農林大



統一会堂の訪問

学等の協力によって建築された Community House を訪問するなどし、国際的な協力・文化の伝承の重要性を認識しました。研修期間中、ホーチミン市・フエ市(市街・ラグーン・農村域等)では採水し水質検査を行い、その結果を16日(火)に成果発表しました。当日は50名を超えるクオック・ホック高校やフエ農林大学の学生、国際交流科目でベトナムを訪問していた京都大学の学生・教員14名が参加し、水質検査・食文化等について発表し日本語・英語・ベトナム語が飛び交う活発な議論が交わされていました。受講生からは「日本にも取り入れるべきベトナムの文化・制度がある」などの感想が寄せられました。受講生には、探求成果発表会のあと、フエ農林大学から修了証が授与されました。

【関連リンク】

京都大学「科学体系と創造性がクロスする知的卓越人材育成プログラム(略称ELCAS)」:

<http://www.elcas.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学大学院地球環境学堂・地球環境学舎・三才学林:

<https://www2.ges.kyoto-u.ac.jp/>

国立研究開発法人科学技術振興機構次世代人材育成事業 グローバルサイエンスキャンパス

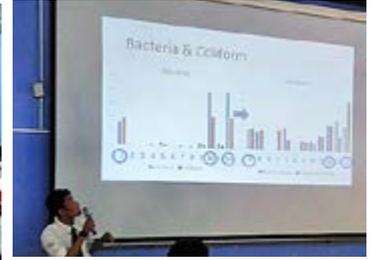
<http://www.jst.go.jp/cpse/gsc/>



フエ市ラグーンの視察、採水



発表会場の様子



発表の様子



フエ農林大学での集合写真

(学際融合教育推進センター-高大接続科学教育ユニット)

[目次に戻る ↗](#)

## 訃報

このたび、越島哲夫 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

## 越島 哲夫 名誉教授

越島哲夫先生は、10月10日逝去されました。享年90。

先生は、昭和27年3月京都大学農学部農芸化学科を卒業後、京都大学木材研究所助手を経て、農学博士の学位を取得後、通産省工業技術院大阪工業技術試験所に勤務し、昭和28年12月米国ニューヨーク州立大学林学部において在学研究をされ、昭和50年11月に京都大学木材研究所教授に就任されました。平成2年3月停年により退官され、同年本学より名誉教授の称号を授与されました。先生は、長年にわたり木材化学の教育と研究に携われ、木材中のグルコマンナンの化学構造を解明されるとともに、木化植物中におけるヘミセルロースとリグニンの結合体の構造と機能を解明する研究に取り組み、国際的に高い評価を得られました。また、バイオマス資源の有効利用の重要性に着目され、マイクロ波を用いたバイオマス変換プロセスの開発に先駆的な業績を残されました。リグニン・多糖結合体に関する初めての英文書籍『Association between lignin and carbohydrates in wood and other plant tissues』を出版された他、学生、研究者向きの数多くの書籍を出版されました。また、先生は、日本糖質学会理事、繊維学会理事、国際木材科学アカデミーフェローなどを歴任され、国内外の学会活動や教育を通して、木材化学やバイオマス変換の分野に多大な貢献をされました。



(生存圏研究所)

[目次に戻る](#)